

往生記の内容に就いて

小田 宏 順

淨土宗は我が力を知ることによつて開かれ、念佛の安心は自己を知ることによつて始まるのである。即ち自己反省によつて体力、智力、道德力、生命力等自分に一体どれだけのポシビリティがあるかを確認して、しかるのち、自己の力に相応した唯一の道を求めて精進して行く、換言すれば自己の力の無能を熟知し、大悲深重の佛力を信じて打ち縋る任意口称の信仰に生きるのが淨土宗の教えである。これは最初に如機根を知れと教える。吾等人生の奥底には揺わんとすれども揺わねず、拂わんとすれども拂われない悲哀が潜む、隠らざる人間の弱きを自覺する。そこに佛を見出すのである。

谷廬に随りし人は藤の蔓を求め、井戸に随つれば救いを叫ぶ、果して我等人生の闇黒にあつて誰に救いを求め、如何なる綱に縋り、如何に救いを求める叫びを発するか、磨路に迷ふもの、唯一の喜びは光であり、明るさであり、随れるもの、助なる道は救いを求める声であり、綱である。

真に自己をみつめる時、自分の体力、智力、徳力、生命力等すべて悲しい儚きものであり、而も現実曝露の悲哀火に焼かれ、水に溺るゝ、染が眼前にまだくゝと人間世界に見せつけられてゐるではないか、茲に仰いで仏の親、救いの親を求めて奥剣に佛に打ち縋る心が生ずるのであ

る。然らば無能無力の自分は何を理想とし、何人に頼り、如何なる綱に縋るべきであるか、これを、法然上人は往生の理想を擧げよ、とてこれな体達をお教え下さつたのである。

往生とは往きて生れることであり、此處を捨て、彼處に往きて生れる。穢れを捨て、淨きに往く、闇黒を去つて光明に生れる。墮落をさけて向上に生ざる。悲しみを捨て、喜びに生ざる。惡を離れて善に往きことであり、暗き闇の世界を打ち捨て、輝く如來の光明に生ざることであり、罪に穢れ苦痛に辱られ惡に纏れたるこの生涯を打ち捨て、善に樂しみに遁ち光に輝く弥陀の淨土こそ私共のみ親のまします樂土であり世界である。

故に一分でも私の生活が改善されるなればそれは一分の往生であり、私の胸の穢れが少しでも淨化されるならばそれは少分の往生である。そして最後にこの穢れの身も心も世界も捨てられて、淨き身と心と土地に更生することが出来たならそれが即ち大往生である。

されば自ら極り得ず、解脱し得ざるもの、唯一の綱は阿弥陀佛であり、契住する自己の歸路は極樂淨土である。この淨土往生の事をお書き下さつたのが往生記であり、詳しく云えば往生得、不得記と云うべきである。

更に往生せんには如何にすべきかその態度等に於ては善惡に様に分數して、人の振り見て我が振り直せと説かれ難茲往生の機として往生の得、不得の諸機をあげて教えられ、往生を遂ぐる機數に就いては五ツを引挙して、

即ち(一)には

智行兼備念佛往生の機(哲学と倫理の上に宗教的體驗から念佛しつゝ、人生活を送つて茲に往生する人)

(二) ツには

義解念佛往生の機へ先哲のみ教えを繙き尋ね、慈悲の涙と光りによつて救はれることを會得して勇んで念佛して往生を遂ぐる人)

(三) ツには

持戒念佛往生の機へ五戒、八戒、十戒等の佛の戒め給う戒法を一大決心を以つて持ちつゝ、念佛して往生を遂ぐる人)

(四) ツには

破戒念佛往生の機へ我な身を振り返り罪に泣き戒法の守り得ざるを悲しみ、縮む魂をだきあげて一重に佛様のみ手にすなりつゝ、念佛を称えて往生を遂ぐる人)

(五) ツには

愚鈍念佛往生の機へ我な身の智慧、才覚を顧みずたゞ教えられるまゝに素直に聞いて單直仰信して日夜に念佛相續して往生を遂ぐる人)

といとも親切に説かせられ、就中

愚鈍念佛往生の機こそ、還愚性愚のそのまゝに何も知らない愚かなものであるが、み佛にうちすがれば必ずお救い下さると云うことを深く信じて、あゝ嬉しいことよと純真無垢な素直な心で念佛して往生を期せよ、ととりわけ懇ろに説かれ教えられたのが元祖大師の御依の往生記の内容である。